

「実践報告」

アブラボテを用いた小学校道徳の授業実践

永田爽子（長崎大学教育学部）

大庭伸也（長崎大学人文社会科学域（教育学系））

緒言

本研究で着目するアブラボテ(*Tanakia limbata*)は、卵を生きた淡水性二枚貝類の鰓内に産み込み、子は卵黄を吸収し終えるまで貝内で過ごすという特徴を持ったタナゴ科の淡水魚である。そのため、タナゴ類はマツカサガイ(*Pronodularia japonensis*)などの二枚貝類と絶対的な共生関係にある。アブラボテは環境省レッドデータブック(RDB)(環境省 2020)で準絶滅危惧種、長崎県 RDB(長崎県 2017)で絶滅危惧 IB 類に指定されている。マツカサガイは環境省 RDB で準絶滅危惧種、長崎県 RDB で絶滅危惧II類に指定されている。全国的にも、長崎県でも絶滅が危惧されている生物であり、本種の現状を一般の人にも認知してもらう必要がある。

筆者の一人・永田は高校や大学で行ってきたアブラボテの研究を学校教育に生かすことができないかと考えた。これまで平戸市で暮らしてきた永田は、高校生のおきにアブラボテの研究を始めるまで、希少なアブラボテやマツカサガイという生物が身近な場所にいることを知らなかった。地域の子どもたちは自分の身近な場所にいる生物を知る機会もなかなか少ないのかもしれない。文部科学省(2008)によると、各種調査結果から自然や地域社会と深く関わる機会について、都市化の進展等とともにどんどん減っていると述べられている。また、保護者の多くは、体験活動は重要であると認識しているものの、現在の子供たちは自分が子供の頃と比べて体験活動の機会が少なく、また、学校の授業や行事以外に体験活動をできる機会が十分でないと感じている(文部科学省 2016)。しかし、学校教育における教員の業務の増加による多忙化において宿泊学習等以外で新たに自然体験を計画したり、地域の自然について知る機会を作ったりすることは容易ではないと考えられる。また、子どもたちと地域の人々との交流、自然に触れる機会が減少する現在、このままでは、地域の資源を生かした自然体験活動は少なくなり、地域の人々も地域の資源を守らなければならないという意識を維持していくことが難しくなる可能性がある。

そこで、道徳教育の主題「すべての命を大切に」でアブラボテを用いた授業実践を現役の教員に行ってもらい、児童の感想や担任教諭のインタビューを行った。この結果をもとに、よりよい地域資源を学校教育へ生かす方法を検討し、アブラボテを用いた教材開発をすることで、地域の資源を生かした道徳教育や理科教育、体験活動に貢献することを目的とした。

方法

長崎県平戸市内の A 小学校で 2020 年 9 月 16 日 5 時間目、4 年生道徳 主題「すべての命を大切に」の授業において、説話部分で子供たちにとって身近な平戸市内の生き物・アブラボテとマツカサガイについて取り上げた。説話では、アブラボテとマツカサガイの簡単な生態や環境の大切さを動画や写真を用いて授業者が説明した。新型コロナウイルス感染防止対策として、今回は直接、筆者の一人・永田が授業をするのではなく、永田が説話部分のみ PowerPoint でスライドを作り、担任教諭に授業をしていただいた。授業後、担任教諭にインタビューを行い、児童には授業を受けてみての感想を書いてもらった。

なお、説話より前の授業の概要は以下の通りである。

〈資料について〉

『ヒキガエルとロバ』

(出典：『わたしたちの道徳 小学校 3・4 年』、2014、文部科学省、東京都)

本資料には、アドルフ、ピエールたち 4 人の男の子が登場する。学校の帰りにヒキガエルを見つけ、気持ち悪いと言い石を投げつけていたところ、年老いたロバが荷車を引いて通りかかった。ロバは、足下にいる傷ついたヒキガエルに気が付く。農夫から鞭でたたかれながらも、荷車でヒキガエルを轆き殺さないように足を踏ん張り、ヒキガエルをよけて通り過ぎる。その一部始終を見ていたアドルフたちは、ロバの行動に心を揺り動かされるという話である。

本時のねらいは、ヒキガエルをいじめることを楽しんでいたアドルフたちの反省を通して、すべての生き物の命を大切にしようとする態度を養うことである。授業では、『ヒキガエルとロバ』のお話をもとに、登場人物の気持ちになって一連の行動について考えることにより、すべての命を大切にすることを養っていく。その後、お話から自分の身近な生き物の命について考えるために子どもたちにとって身近なアブラボテについて説話を行った。実際に使ったスライドは図 1 の通りである。

<h2 style="text-align: center;">身近な命のつながり</h2>	<p style="text-align: right;">現在・・・バイパス道路建設中</p> 
<p>アブラボテ</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ 田平町の田んぼの用水路や川に住んでいる ・ 準絶滅危惧種 ・ 貝の中に卵を産む珍しい魚 	<p style="text-align: right;">その影響で・・・</p> 
<p>マツカサガイ</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ 田平町の田んぼの用水路や川に住んでいる。 ・ アブラボテが卵を産むために必要 ・ 準絶滅危惧種 	
<p style="text-align: center;">アブラボテの 産卵の様子</p> 	<p style="text-align: center;">←アブラボテの産卵動画</p>

図 1 授業で使ったスライド

この説話のねらいは、児童が暮らしている平戸市内にも貴重なアブラボテという生き物がいて、アブラボテを守るためには、産卵に必要な貝、川に住む他の生き物、川や田んぼなどの周りの環境とのつながりも大切にしていける必要があることに気づかせることである。

まず、アブラボテはマツカサガイがいないと生きていけないことを伝えた。また、産卵の動画を見せることで、アブラボテの生態の面白さを知らせ、児童の興味・関心を持ってもらう工夫をした。そして、この場所ではバイパスが建設されていたり、農作業をしやすくするための工事が行われようとしていたりしていること

を伝えた。アブラボテを守るためには、アブラボテだけを守れば良いのではなく、周りの環境や他の生き物とのつながりまで考える必要があるというお話をして説話を終えた。今回の説話で、アブラボテに限らず、自分の町の生き物を守るために、自分たちができることは何か考えることで、主題である「すべての命を大切にする」を達成できるのではないかと期待される。

結果

(1) 児童の感想 (原文ママ)

- ・アブラボテとマツカサガイの話聞いて、絶滅危惧種の2匹は大切にしたいです。生き物の命はみんな守っていきなうと思ひました。(T.K)
- ・マツカサガイ、アブラボテのことがよくわかりました。これから環境を守っていかうと思ひます。人間だけじゃなくて魚の命も大切だとテレビを見て思ひました。(H.A)
- ・マツカサガイとアブラボテは、一緒にいないと死ぬということがわかってよかったです。またいろいろなことがあつたら教えてください。(M.K)
- ・わたしは、アブラボテは、マツカサガイがいないと産卵ができないとわかりました。アブラボテは、マツカサガイに卵を産むのでマツカサガイがいないと絶滅してしまうとわかりました。命は協力が必要なきもあるとわかりました。(Y.N)
- ・アブラボテとマツカサガイのことを知つて、アブラボテとマツカサガイが絶滅危惧種と知つて悲しかったです。いじめはやめて、命は絶対に大切だとわかりました。またしたいです。(T.K)
- ・アブラボテとマツカサガイは一緒にいないと生きられないとわかりました。お父さんからアブラボテのことは聞いたことがあるけど、マツカサガイのことは聞いていないからよくわかりました。(O.R)

(2) 担任教諭へのインタビュー

・Q1 説話部分を行ったときの児童の様子は何？

A. 授業参観での授業であったため、児童と保護者も授業に参加した。児童も保護者も身近な場所に絶滅危惧種がいることを知らなかつたと言つていた。児童も保護者も身を乗り出したり、テレビの近くまで来たりして、産卵の様子を見ていた。「もう一回見たい」という発言も見られた。

- ・Q2 昨年も4年生の担任をされていたようだが、同じ授業のまとめの部分を変えたことでどんな効果があつたか？

A. 昨年は、まとめとして、「もしも苦手な動物に出くわしたらどうしますか？」と発問をした。児童の答えとして生き物を殺すというような意見は出なかったが、「見て見ぬふりをする」、「そっと人がいないところに持っていく」などの、なるべく関わらないようにしようという消極的な答えが返ってきた。今回行ったアブラボテを使ったまとめでは、絶滅危惧種という珍しさや、スライドでアブラボテやマツカサガイなどの実際の生き物の名前や写真、動画などを使って紹介をしたことで、児童の興味関心を惹きつけ、生き物を守ろうとする積極的な関与を感じた。

・ Q3 さらに改善するとしたら？

A. 授業参観だったため、保護者にも意見を言ってもらえばよかった。そうすることで、児童がさらに深く考えるようになったかもしれない。また、できれば本物のアブラボテを見せたかった。

考察

今回アブラボテを道徳の授業で取り扱ったことで、児童の感想にあるように、「生き物の命はみんなで守っていきたい」「命は絶対に大切」「環境を守っていこう」というような命を大切にしようとする姿勢が見られた。昨年の同単元の授業では、教師が「もしも苦手な動物に出くわしたらどうしますか？」という発問をすると、児童は「見て見ぬふりをする」「そっと人がいないところに持っていく」などの、命を殺そうとはしないもののなるべく関わらないようにするという消極的な答えが返ってきていた。また、児童の感想や担任教諭へのインタビューから、アブラボテやマツカサガイという希少な生き物がいることを児童も保護者も知らなかった人が多いこともわかった。児童も保護者も身を乗り出したり、テレビの近くまで来たりして産卵の様子を見ており、興味・関心を惹きつけることができた。そのため、児童にとって身近な場所に生息する地域の資源であるアブラボテを用いることによって、児童自身が自分から「命を守りたい」という積極的な想いを持てる終末になったと考えられる。そして、児童から「またこんな授業をしたい」「また教えてほしい」などの、さらに生き物について知りたいという意見も得られた。これまで平戸市で暮らしてきた永田は、5年前に高校生でアブラボテの研究を始めるまで、希少なアブラボテやマツカサガイという生物が身近な場所にいることを知らなかった。地域の子どもたちは身近な場所にいる生物を知る機会もなかなか少ないのかもしれない。文部科学省(2008)によると、各種調査結果から自然や地域社会と深く関わる機会について、都市化の進展等とともにどんどん減っていると述べている。今回、道徳の授業の中でアブラボテやマツカサガイについて知ったことで、命の大切さについて学ぶことができ、それに加えて地域の生き物について知る機会を作ることができ、自然への興味・関心も高まったと考えられる。

また、保護者の多くは、自然体験を含む体験活動は重要であると認識しているものの、現在の子供たちは自分が子供の頃と比べて体験活動の機会が少なく、また、学校の授業や行事以外に体験活動ができる機会が十分でないと感じている(文部科学省 2016)。体験活動に関する保護者の意識『(出典) 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成 26 年度調査)」』として、子供の発達段階が上がるにつれ、体験活動よりも勉強を優先させたい保護者は増えているが、全体として 8 割弱の保護者が体験活動の必要性を感じている。さらに、7 割程度の保護者が、自分が子供の頃と比べると「現在の子どもたちが体験活動をする機会は少なくなっている」と感じている。このように、保護者から見ても体験活動が十分でないと感じている中で、今回、動画や写真を用いた間接的な体験であるが、授業参観で保護者が子どもたちと一緒に地域の身近な生物について知る良い機会になったと考える。

一方で、文部科学省(2016)によると、「体験活動の中には、対象となる実物に実際に関わっていく「直接体験」のほか、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる「間接体験」、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ「擬似体験」があると考えられる。しかし、「間接体験」や「擬似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている。今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」である。」と述べられている。担任教諭のインタビューで、できれば本物のアブラボテも見せたかったという意見もあったように、さらに児童の体験活動の質を上げるためには、本物を教室に持ってきて見せる、あるいは実際にアブラボテのいる水路や川に行つてアブラボテが住んでいる環境も合わせて見ることができるとなるとお良いと考えられる。児童がこのような体験ができるように、教師が地域の生き物について知ることや自然体験を安全に行うための知識を身につける必要があるだろう。また、希少な生き物やその周りの環境を、子どもたちの教育のためにも、地域の人と協力しながら守っていく必要もあると考えられる。

謝辞

道徳の授業で協力していただいた A 小学校のみなさん、授業をしていただきインタビューに答えていただいた担任教諭に感謝申し上げます。

引用文献

環境省 (2020) 環境省レッドデータブック,

<http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf> (閲覧日 2021.01.31)

文部科学省 (2008) 体験活動事例集－体験のススメー [平成 17、18 年度 豊かな体験活動推進事業より],

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm

(閲覧日 2021.01.28)

文部科学省 (2014) 『わたしたちの道徳 小学校 3・4 年』, 東京

文部科学省 (2014) 青少年の体験活動の現状について

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/036/shiryo/___icsFiles/afieldfile/2016/11/16/1379441_6.pdf (閲覧日 2021.01.29)

文部科学省 (2016) 平成 28 年度文部科学白書,

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/1389013_007.pdf
(閲覧日 2021.01.28)

長崎県 (2017) 長崎県レッドデータブック

<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kurashi-kankyo/shizenkankyo-doshokubutsu/rarespecies/reddata/298016.html> (閲覧日 2021.01.31)